

<b>Title</b>	「アウスブルクの宗教平和」とは何であったのか
<b>Author(s)</b>	深井, 智朗
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume26, 2011.3 : 139-151
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3263">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3263</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 「アウクスブルクの宗教平和」とは何であったのか

深井智朗

### はじめに

本日はアウクスブルクの独日文化交流会のお招きをいただき、皆さまにお話しさせていただくことができますことを大変光栄に思っております。皆さんご承知の通り、今年（この講演は二〇〇五年になされた）アウクスブルク市が「アウクスブルク宗教平和四五〇年」を記念する行事を一年を通して行っております。実は私はそのひとつの学術シンポジウムに招かれまして、久しぶりにアウクスブルクに戻ってきました。そのためにアウクスブルクのHK（商工会議所）の方々が特別なご配慮をくださいましたことに御礼申し上げます。しかも今日のこの講演会も主催してくださいました。

アウクスブルクとその周辺に住む日本人の方々にもこの記念の年の意義を理解してもらうために、私に日本語で講演するようにということであります。そのために独日文化交流基金のヴィルヘルム・ベーリンガー氏が多額の寄附をしてくださったとうかがいました。心より御礼申し上げます。ベーリンガー氏は私がまだアウクスブルクに住

んでおりました頃からいつもご親切な友人で、車を持たない私たちが、日曜日の朝、教会までの道を歩いているのを知って、毎週迎えに来てくださるようになりました。土曜日になりますと、電話があり、明日、この時間に迎えるので、道路で待つているようにと言ってくださいなのです。上品なユーモアの持ち主であるペーリングガー氏は、私がドイツにやってきました前日に、わざわざメールを下さって、「明日の朝いつものように車で迎えに行くので、九時半に東京の家の前で待つているように」と書いてくださいました。お待ちしておりましたが、ペーリングガーさんの迎えがありませんので、私は仕方なく今回はルフトハンザを利用することになりました。

一昨日でしたが、私の今回の主たる仕事でありますシンポジウムは終わりましたので、今日は自由になります日本語でお話できます。私はこの自由を大変喜んでいきます。しかしご出席のドイツの方々にはご不便をおかけします。大学や市民講座で日本語を勉強中の方のためには、日本語の原稿をコピーしてあります。それを見て字を追ってみてください。日本語をまったくなさらないが、心はいつでも日本と共にある友人の方々にはドイツ語の要約をお渡ししてありますので、御覧いただければと思います。今日の話の七割くらいはドイツ語になっていると思います。ご質問は日本語でも、ドイツ語でもけっこうです。

さて、はじめに、皆さんにご紹介したい本があります。アブナー・シモニという人が書いた『ティバルドと消えた十日間』（翔泳社）という小説です。子供向けの歴史小説ですが、中世の歴史に関心を持つ者には大変興味深い話です。私の尊敬する科学史の専門家に紹介されて読みました。子供向けに書かれているようですが、しかし大変よく出来た本で、教えられることが沢山あります。

一五八二年、ローマ皇帝グレゴリウス一三世は、暦法の改定を発表しました。これまでのユリウス暦がさまざま

な面で不都合が多く、正確さに欠けるということで、新しくいわゆるグレゴリウス暦を発表したので。この小説はこの出来事を題材にしたフィクションです。一五七〇年一月一日に北イタリアのポローニアにひとりの少年が生まれました。彼はティバルド・ボンディーと名付けられました。この少年が一二歳になった一五八二年のある日、あの皇帝グレゴリウス一三世の勅令が出て、暦が改訂されることになったのです。しかもこの改訂にあたって、カレンダーを調整するために、旧暦から一〇日を削るといふ技術的な作業が必要となり、それがちょうど彼の誕生日にあたってしまうという設定です。ボンディーは自分の誕生日を守るために皇帝に直訴しようとするというお話です。ストーリーは巧みなものとは言えませんが、読み続けて行きますと、ルネッサンスという時代と中世の天文学の様子を知ることができずから、新しいスタイルの教養書と言ってもよいかもしれません。

ところでこの一五八二年の出来事は、後に「カレンダー紛争」と呼ばれるようになりますが、小説で描かれたような出来事はなかったにしても、実はこの時代の人々を巻き込んだ大きな出来事だったのです。このカレンダー紛争という出来事をいろいろと調べて行きますと、ボンディーのような少年が沢山いたことがわかってきます。この時代の人々は皇帝に直訴などできませんでしたが、自分の誕生日のために戦うような少年はいなかったと思います。この時代のヨーロッパの社会の仕組みを揺るがすことになった、後の宗教改革と呼ばれる出来事がこれと深く関係しているのです。あとで詳しく述べますが、この新しい暦は、プロテスタントの側からはどうしても受け入れることができない事情があったのです。それでこの時代、グレゴリウス暦とユリウス暦とが入り混じり、大変な混乱が続いたわけです。

私たちの愛するこのアウクスブルクの町もこのカレンダー紛争に巻き込まれ、大変な被害を受けた町のひとつでした。今日はみなさんに、今から四五〇年も前のアウクスブルクの話をしたと思います。できるだけわかり

やすくお話ししたいと思っておりますが、このカレンダー紛争を入り口にして、中世の自由都市アウクスブルクの宗教改革はどのようなものであったのか、あるいは今年その記念の行事が続いている「アウクスブルクの宗教平和」とは何であったのか、なぜ聖ウルリッヒ教会は、カトリックとプロテスタントが共用しているのか、ということについてお話しできればと思っております。

### ルターの改革のはじまりと終わり

宗教改革とは何であるのか、ということとは今日大きな問題でありまして、ここでそのことの説明をはじめますと、そのことだけで予定の時間が終わってしまいます。宗教改革と今日私たちが呼んでおります教会の改革は、早ければ一四世紀の終わりにはじまり、そして一八世紀には終わった西方教会の長い長い教会改革の歴史のことなのです。その中でアウクスブルクの名前はしばしば登場します。ルターは聖アンナ教会に滞在したこともあります。一五七一年一〇月三十一日にルターが九五カ条の質問状をヴィッテンベルクの教会の入口に貼り出したことで宗教界改革のはじまったという伝説が歴史的事実であったと信じている歴史家も神学者も今日ではほとんどいません。しかしルターの登場によって、ローマを中心とした西方教会に分裂が生じたことは確かです。今日カトリックとプロテスタントと呼ばれています。もちろん当時はそのような名前と呼ばれたことはありません。歴史的な記録の中に登場しますプロテスタントは、「アウクスブルク信仰告白派」、あるいは「アウクスブルク信仰告白を奉じる者たち」となっています。カトリックの方は「皇帝の古い宗教」と呼ばれています。「古い」というのは「古くなってしまっただ」というネガティブな意味ではなく、「従来の」、「伝統的な」という意味です。

さて、プロテスタントの正式な名称がわが町アウクスブルクと結びついてはいるわけですが、帝国自由都市のひとつであったアウクスブルクで、一五三〇年に対立する教会勢力の争いをやめさせ、帝国の一致を守るためにカール五世が帝国議會を再び召集します。ルターを支持する者たちを追放するだけではおさまらないほどに、運動は激化していったのです。さてこの帝国議會で、カール五世はルターを支持者たちに自分たちの立場を説明するように求め、そのために提出されたのが、「アウクスブルク信仰告白」と後に呼ばれるものでした。もちろんこの信仰告白は認められませんでした。議事録には「アウクスブルク信仰告白を奉じる者たち」という記録が残ったのです。これ以後、ルターを支持する者たちは「アウクスブルク信仰告白派」と呼ばれるようになったわけです。

その後も激化する両者の対立を何とか調停する試みは皇帝の側で繰り返されてきました。一五五五年にアウクスブルクで開催された帝国議會はその問題をひとつの議題として扱うことになりました。しかしカール五世はこのあまり見込みのない調整に熱心ではありませんでした。この帝国議會は彼の弟ドイツ王であるフェルデナントが招集しています。またカトリックの側でも、調停をしてルターを支持者たちを認めることはしたくないわけで、この議會には非協力的でありました。しかしここでいわゆる「アウクスブルクの宗教平和」と後に呼ばれるようになった決議がなされたのです。「アウクスブルクの宗教和議」と呼ばれたりもしますが、私はそれには反対です。なぜならこの帝国議會は、宗派問題だけを扱う會議ではなく、帝国議會のさまざまな議題のひとつが宗派問題であったわけです。今日「アウクスブルクの宗教平和」と呼ばれている文章は、帝国議會の議事録の一部のことです。

さて問題は、この議事録の中に何が書いてあるのか、ということなのですが、しばしばここでは「領主の宗教がその地の宗教になる」、「領主の宗教、その地に行われる」ということが決まったと言われ、有名なことは *cuius regio, eius religio* が決定されたと言われるわけです。しかしこれも間違いとまでは言えないかもしれませんが、誤

解です。おそらくそういうことを言う人はこの議事録を実際には読んでいないのでしよう。この言葉は議事録の中には出てきません。議事録はドイツ語で書かれていますから、ラテン語であるはずはないのです。これは後の教会法学者ヨハン・シュテファンという人がアウクスブルクで一五五五年に決定されたことはどうということなのか、ということの説明するために一六一二年に出版された彼の『教会法要綱』という本の第二版の中で作った言葉です。ここで決められたことのひとつは、領主がその領内の宗教を決定することができるということでした。そして合わせて重要なことは、領主の宗教と異なった宗派を持つものは移住をすることができるということでした。つまりカトリックの領主の邦に在るプロテスタントの信者には移住の自由を認めたのです。ですから、議事録のほとんどの内容は移住にあたってどれだけの財産を持ち出すことができるのか、移住先で財産は保護されるのか、ということでした。これは政治的な決定でしたが、とりあえず帝国内の宗派分裂によって起こった混乱を收拾するためのひとつの決定でありました。これによってルター派は法的に容認されたと言われるわけですが、カトリックは議会中に特使を引き揚げており、この議決を承認してはいません。それにこれは法的な解決でありませんが、現実の問題を何も解決はしていませんでした。というのも、ほとんどが農民であつた当時の人々にとって移住というのは考えにくい選択肢であつたからです。

さて、このような議決によれば一五五五年以後は、アウクスブルクはカトリックかプロテスタントの単独宗派になるはずでした。しかし実際にはそのようにはなりませんでした。ですから一五五五年のアウクスブルクの宗教平和によつて、ルター派が公認されたとか、信教の自由がはじめて確立されたとか、ここから新しい時代がはじまつたと見るのは間違いです。実際には一五五五年以後もひとつの都市、ひとつの邦に複数の宗派が存在していたのです。ですから、一五五五年のアウクスブルクの宗教平和はそこから直接に、今日で言うような宗派の共存や、諸宗

教の対話と協力と結びつくようなものではなかったのです。そのことを証明する事実がアウクスブルクのような帝国自由都市の存在でした。帝国自由都市にはアウクスブルクの宗教平和が適応されませんでした。これは大変な問題でしたが、帝国自由都市における宗派問題についてはいろいろな本が出ていますので、そちらを御覧ください。私も最近この問題を東京藝術大学の音楽史の教授と一緒にあるシンポジウムで論じ合いました。その成果はそのうち日本語では公開されることと思います（これは二〇〇九年に出版された。参考文献を参照のこと）。今日はその一例を先ほどのカレンダー紛争をサンプルにして紹介してみましよう。

### アウクスブルクのカレンダー紛争

先ほど申しましたように、一五八二年に教皇グレゴリウス十三世が、いわゆるユリウス暦からグレゴリウス暦への変更を宣言したのです。確かにユリウス暦にはさまざまな問題があり、この変更は合理的な面も持っていました。アウクスブルクは実はその翌年の一五八三年にグレゴリウス暦を採用したのですが、この時代の住民のほとんどがプロテスタントであったアウクスブルクでは、ルター派によって「反キリスト」とまで呼ばれた教皇の命令に従って暦を変更することは信仰の良心が許さないとということになったわけです。それでプロテスタントの側はこの暦の使用を拒否するのです。そうしますと、どういう事態になるのか。同じこのアウクスブルク市内で、二つの暦が行われて使用されることになるのです。同じ場所で、同じ時間を生きているわけですが、月も、日も、曜日も違うということになります。現実には何も変わらないのですが、生活するには大変不便です。現実的にはアブナー・シモニーの小説にありましたように、旧暦から一〇日の削除されていますから、カトリックにとって日曜日はプロテス



タントではまだ木曜日なのです。一番有名な話は、カトリックがクリスマススを祝つても、まだプロテスタントはアドヴェントなのです。これは大変生活を混乱させることになります。

キリスト教の世界では毎週金曜日によく魚を食べます。十字架につけられたキリストが、三日後の日曜日に復活したとすれば、金曜日が十字架につけられた日ですから、キリスト教徒はその日には肉ではなく、魚を食べてその受難を覚えるという習慣になったのです。もちろん「魚」がキリスト教ではイエス・キリストのシンボルであることからそのような習慣が生まれるのでしょう。金曜日になりますと、聖アンナ通りの市場でも魚がたくさん売られています。これは最近ではその宗教的な意味を忘れてしまつている人が多いかもしれませんが、宗教的伝統なのです。しかしその金曜日もグレゴリウス暦に従うとまだ金曜日ではありませんので、大多数のプロテスタントは別の日に魚を食べることになります。金曜日が魚なので、木曜日は当然肉を食べようとカトリックは考えるわけですが、その日はほとんどがプロテスタントであつた肉屋は休みということになります。このような歴によるカトリックへの抵抗、さらには実際の軍事的な抵抗を繰り返すプロテスタントを、カトリックの市議会は軍事力で屈服させ、カレンダーがグレゴリウス暦に統一されることになりました。このあたりのことはもう一五年くらい前ですが、B・レッケ先生の二冊本の研究書が出ておまして、カレンダー紛争や当時のアウクスブルクの状況が大変詳しく書かれています。

ところで、そもそもアウクスブルクはカトリックとプロテスタントのどちらの人口が多かつたのか、ということですが、それには変遷があります。しかしこの時代は圧倒的にプロテスタントが多かつたのです。これはこの町が帝国自由都市であつたということと関係しています。

## 帝国自由都市アウクスブルク

アウクスブルクは、現在でも主教座教会があることからわかります通り、伝統的にはカトリックの町でした。その名は皇帝アウグストゥスにまで遡るもので、ローマの植民都市として、既に二千年を超える歴史を持つているわけです。このアウクスブルクは宗教改革がはじまりますと、皇帝やカトリック教会から特権を与えられているヤーコブ・フッガーの町であるにもかかわらず、宗教改革を支持する手工業者たちの強い働きかけで、プロテスタント側の諸侯の軍事同盟であるシュマルカルデン連合に加入します。市議会はついに一五三四年にルター派を容認し、カトリックの聖職者を追放し、この伝統あるカトリックの都市はついにプロテスタントの都市となったのです。ルターがこの町を訪ねたのはこのような事情と関係しているわけです。

ところがプロテスタントはその後起こったシュマルカルデン戦争に敗れてしまいましたので、カトリックの聖職者がアウクスブルクに戻ってきた上に、帝国都市についての勅令によって、市の議会の構成員はカトリックであることが義務づけられました。それが一五四八年のことですから、一五五年のアウクスブルクの宗教平和の前のアウクスブルクは二つの宗派がさまざまな問題で衝突せざるを得ない状況でした。

一五五年のアウクスブルク宗教平和の規定によって、アウクスブルクは法的には完全にカトリックの都市となりましたが、実際には二つの宗派の共存は続いています。実はその他の都市や領邦でも同じことが起こっていたのです。アウクスブルクの宗教平和によって定められた移住の自由は実際にはほとんど機能していなかったのです。この後一六四八年になってウエストファリアで平和のための議会在開催され、そのひとつのオズナブリック条約

によつて、一六二四年の領主の宗教を基準として、その邦の宗教を定めることが決まり、帝国自由都市についてはその実情に合わせて、それぞれ宗派の並存が認められることになりました。

### アウクスブルクの宗教平和とは何であつたのか

それでは「アウクスブルクの宗教平和」とは何であつたのでしょうか。私の考えは「アウクスブルクの宗教平和」を理想化することも、また無意味なものとしてしまうことも間違いだということです。アウクスブルクの宗教平和は、今日における宗教の共存や共生、寛容の精神的な淵源ではありません。これはむしろ宗教の問題の政治による解決という、古代以来キリスト教が慣れ親しんできた問題解決方法のひとつに過ぎません。

またここでの解決は、実際には宗派共存ではなく、今日の言葉で言えば公共の問題には宗派問題は持ち出さないという考え方で、日常生活にかかわるあらゆる問題、そして制度としての教会の礼拝の問題に至るまで、市民の決定には宗派は関与しないという方向に展開して行くのです。ですからこの時点で、宗教は世俗化したのではなく、宗教問題を含めたあらゆる公的な決定において意図的に排除されるようになったのです。それは近代の教会と国家の分離の原則とか、宗教の自由というものはまったく質的に異なつたものです。

しかしそこに近代の宗教問題に対する私たちの態度の萌芽も見られるのです。それは宗教を私事の領域にとどめるといふことです。これは同じ頃、アングロサクソン世界に展開して行つた宗教改革が目指したものと異なつた問題の解決方法です。神聖ローマ帝国における宗教の問題の解決は、結局は公の場に宗派問題は持ち出さないといふ後の解決の先取りでありました。それに対してアングロサクソン世界に展開したプロテスタントイズムの解決方

法は、さまざまな宗派が共存できる宗教システム、私はそれを「宗教市場」と呼んでいます、の構築ということであつたわけです。

そういう意味では、ここにたとえばドイツとアメリカにおける宗教問題の理解の違いの淵源が確かにあります。わかりやすい事例で言いますと、アメリカの公立学校には宗教の授業はありませんが、このドイツにはあります。またアメリカでは大統領が自分の宗教に基づいて公の場で、聖書に手をおいて就任式の宣誓をすることが保証されますが、フランスではいわゆる宗教シンボル法に見られるように、公立学校にイスラムの女性がスカーフをかぶつて出かけた、キリスト教徒の子女が大きな十字架を胸にかけていることを法的に禁止しているのです。

アングロサクソンに展開したプロテスタントイイズムを高く評価する人々は、ピューリタンたちが積極的な意味で、教会と国家の分離の原則を生み出し、宗教の自由、信じる自由を勝ち取ったことによつて、近代社会の基礎が形成されたと見ます。ドイツやフランスの事例は逆に、この宗派争い、そして三〇年戦争、さらには長く続いた宗派共存による日常生活の混乱に疲労困憊した市民が、宗派に依存しない社会を生み出し、社会システムから宗教問題を取り除いた時に、自由な近代社会が生まれたと考えるわけです。

もつと身近な問題では、学校での宗教教育の問題、結婚の問題、税務署が代理徴収しているいわゆる教会税の問題、住民登録における宗派明記の問題、憲法における教会規定や神についての記述問題などいろいろと皆さんが接しておられる出来事がこの問題に実は深く関係しており、アウクスブルクの名前はその歴史とともにこの問題を考える際には何度も登場する町なのです。

そしてさらに二一世紀の私たちが経験しているイスラムとの新しい出会いやグローバル化した国際社会の現実、アウクスブルクの宗教平和とは何であつたのかを改めて考え直すことを私たちに促していると思います。宗教は平

和の要なのでしょうか。それとも一部の人々が考えるように、宗教こそ平和を乱す、世界の一致を妨げるものなのでしょうか。

都市としてのアウクスブルクの歴史的经验はそのことを考えるためのヒントを多く残してくれています。私たちはその意味では大変よい場所です、きわめて現代的な問題を歴史というサンプルを通して考えることができます。今年は町中「アウクスブルク宗教平和四五〇年記念」一色です。必ずしもこの歴史の出来事とは関係のないお祭りも沢山ありますが、せっかくの機会ですから、この問題を考えるための参考になればと思ってお話しさせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

#### 参考文献

- ・ B. Roeck, Eine Stadt in Krieg und Frieden. Studien zur Geschichte der Reichstadt Augsburg zwischen Kalenderstreit und Partât. 2. Bd., Göttingen 1989
- ・ Abner Shimony, Tibaldo and the Hole in the Calendar, Springer 1997 (アブナー・シモニー『ティバルドと消えた十日間』熊谷千寿訳(翔泳社、一九九九)
- ・ 深井智朗・大角欣矢『憶えよ、汝死すべきを 死をめぐるドイツ・プロテスタンティズムと音楽の歴史』(日本基督教団出版局、二〇〇九)

(これは二〇〇五年一〇月七日にアウクスブルク市のリーツラー邸で行われた財団法人独日文化交流会主催の会合での講演原稿である。この年アウクスブルク市とバイエルン州が共催で行った「アウクスブルク宗教平和——一五五五年から二〇〇五年」という年間を通しての行事のひとつとして開催された。当日の様子は Augsburg Allgemeine, 09. Oktober 2005 に紹介

されているが、日独双方から約九〇名ほどの参加者があった。五年も前のものであるが、当日配布した資料を講義でもコピーして使い続けてきたので、今後の便宜を考え、この論集に掲載していただくことにした。）